

F-21

福島県いわき市四倉町海岸地域における復興まちづくりに関する検討

—歴史的景観資源と住民の震災前後の風景観の変化を通じて—

A Research on the Reconstruction Plan in Yotukura Waterfront Area of Fukushima

-Focus on the Local Landscape-

○大塚宏樹¹, 横内憲久², 岡田智秀³, 押田佳子³, 井出純一¹

*Hiroki Ohtsuka¹, Norihisa Yokouchi², Tomohide Okada³, Keiko Oshida³, Junichi Ide¹

Abstract: This study aims to find the attention point for equipment of the seawall in Yotukura waterfront area of Fukushima to reconstruction plan. We investigated to grasp the historic view from historical document and the change conscious to sea before and after Tsunami to citizen in Yotukura. The following are results: it is necessary that the specialist of town management discuss the people in Yotukura and plan to construction of viewpoint on the hill.

1. はじめに—福島県いわき市四倉町(Figure 1)は, 市北東部に位置する太平洋に面した海岸地域である。当地域は 1927(昭和 2)年に日本有数の美しい景観として県内で唯一「新日本百景」に選出された新舞子海岸を有するほか, 近年では漁港と隣接した「道の駅よつくら港」が開業するなど, 「海辺のまち」として発展が期待されていた。しかし, 昨年の東日本大震災により, 当地域も津波による被災地(Table 1②)となり, 現在, 海岸防災の手立てとして堤防高 7.2m の防潮堤整備が検討されている。このような巨大防潮堤が不用意に海岸沿いに整備されるとなれば, これまで四倉地域が育んできた海辺の文化・歴史や景観の価値が消滅してしまう恐れがある。

そこで本稿では, 四倉地域を代表する海に関する歴史的景観資源を抽出するとともに, 地元住民の被災前後の海に対する意識を把握することにより, 今後の防潮堤整備に向けた留意点を導出することを目的とする。

2. 研究方法—四倉地域の海に関する歴史的景観資源を捉えるために, Table 1③(1)の文献より抽出した「四倉十四景」を分析し, その継承状況を把握するために Table 1③(2)に示す現地調査を行う。また, 地元住民の被災前後の海に対する認識と変化を捉えるために, Table 1③(3)に示す意識調査を行う。

3. 海に関する歴史的景観資源

3-1. 「四倉十四景」概要—1700 年代中頃に衡巖和尚が

晩年に四倉地域を代表する景観の価値を詠みあげた四倉地域最古の詩が「四倉十四景」である。その記載内容のうち, 海の風景を詠んだ記述の抜粋を Table 2 に, その記載内容より特定できた視点場を Figure 2 にそれぞれ示す。

3-2. 「四倉十四景」の視対象—Table 2 より全 14 景の詩において海に関する記述がみられたのは 10 景あり, このうち 4 景は海に対する視線方向と視点場が特定できた。

詩の特徴としては「住民は漁業と製塩に利を得て貧乏人はいない(Table 2④)」や「漁船の帰るのを岸辺にいて待っている(Table 2⑩)」というように, 漁業に関する暮らしぶりが主に謳われている。これらより, 当地は古くから海を望む景観が好まれており, 住民たちは漁業を生業とし, 海と密着した暮らしを送っていた様子が伺える。

3-3. 「四倉十四景」の視点場—Figure 2 に示すように, 視点場は, 現在の四倉海水浴場や四倉漁港などを見下ろすような, 陸前浜街道より背後の高台に分布している。

3-4. 「四倉十四景」の継承状況—上述した視点場を現地調査(Table 1③(2))した結果, 時代が移り変わり, 詠まれた当時の情景をそのままの姿で確認することはできないが, Figure 3, 4 に示すように諏訪神社(Figure 2⑤)と別

Table 2. Excerpted the Yotukura-14th landscape about sea

番号	十四景表題	現代語訳(海に関する記述抜粋)
1	四倉聚落	沢山の家屋が接近してならんで, 海岸に沿って四倉の部落は出来ている。住民は漁業と製塩に利を得て貧乏人はいない。
3	津守望海	神社庭前の手すりによりかゝり, 海を眺めると, 果てを極めることが出来ない。唯見ゆるものは, 海の上に漁舟と外に, 大きな商船の走っている帆が雲みの中に見えるばかりだ。
5	諏訪神社	この諏訪神社の御利益を受くるのは四倉の浜である。
8	大悲観音	この観世音の光(御利益)は東奥州の四倉湾を輝らしている。
9	烟寺晚鐘	漁船は帆に風をはらませて海上の波を蹴って帰って来る。この帰って来た漁船が満船している鮮魚の処理に夜遅くまで道ばたで忙しく働いている。
10	漁舟帰帆	朝早く舟を仕度して海に出て漁をする。竹ざおで揚げた網の中には, 沢山の魚がある。夕方になって風が出て来たので漁舟は一つの帆を掛けた。船主が漁夫の家族達は漁船の帰るのを岸辺にいて待っている。
11	磯内晴嵐	潮の声は海辺に寄せて来て丁度仙人の打つ鐘の音のようである。
12	倉屋電煙	松林の中に小さい家が海辺に並んでいる。籠の中に潮水を煮て常に煙が群がって出ている。
13	每台明月	丁度十五日の夜で, 海も天もハッキリと見える。波の中心に映っている月影を見ると感慨無量である。
14	種天海日	海の上は赤いあやかざりを発し盤のように円い。

【例】◇:海に関係ある詩で, 視点場の特定ができたもの ◇:海に関係ある詩で, 視点場が特定できなかったもの ※記号内の番号は各文献で共通した詩の掲載順である(Figure 2のものに対応)。

Table 1. The outline of the research^{1)~5)}

①調査対象地	福島県いわき市四倉町		
面積	63.73km ²	世帯数	2,622世帯
		人口	6,767人
②被災状況(いわき市財政部資産税課に対するヒアリングによる)			
今次津波高	最大津波浸水深 3m	人的被害	直接死:15名 間接死:9名
建物被害	全壊 523棟 大規模半壊 628棟	半壊	1693棟
		一部損壊	2520棟
③調査方法 (1)文献調査 (2)現地調査 (3)意識調査			
調査期間	2012年9月1日(土)~25日(火)	2012年9月19日(水)	2012年9月19日(水)
調査内容	文献[2]~[5]より, 歴史的景観資源を把握	土地利用現況および景観状況の把握	アンケート形式で以下の ・海岸防災について ・成人前および震災前後の景観評価

1: 日大理工・学部・交通 2: 日大理工・教員・建築 3: 日大理工・教員・交通

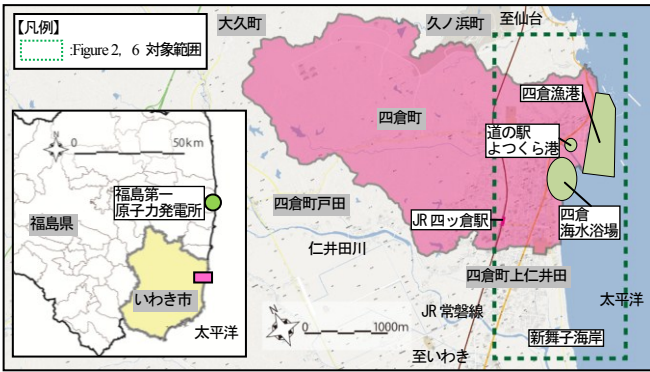


Figure 1. Map of an object Yotukura



Figure 2. The viewpoint of the Yotukura-14th landscape



Figure 3. Suwa-shrine

Figure 4. Beturai-koudajin

Figure 5. Myojin-shrine

Table 3. The answer about opinion poll among inhabitants of Yotukura

質問項目	四倉の海岸防災についてあなたは何を望んでいますか(複数回答可) 14/15人指摘				
回答選択肢	a. 防潮堤	b. 防潮林	c. 避難路	d. 高台移転	e. その他
回答数	7件	6件	10件	1件	1件(より良い景観)
a, b, c 同時回答	5件	a, b 同時回答	1件	a, c 同時回答	1件

雷皇大神 (Figure 2) から海を確認することができた。他方、Figure 5 に示す明神(津守)神社 (Figure 2) と観世音堂 (Figure 2) からの眺めでは、海が植栽や周囲の建物により確認できなかったが、明神(津守)神社は鳥居前部の樹木を間引けば、海を望むことは可能である現状を捉えた。

4. 四倉海岸に対する地元住民の意識

4-1. 景観評価—現在、四倉町に暮らす地元住民の成人前および震災前後の好きな景観を把握するために、当地域のまちづくりに関心が高い「四倉ふれあい市民会議」会員 15 名から得られた回答を Figure 6 に示す。

a) 成人前—現在の陸前浜街道より海側の海浜地を視点場とした海への眺めが好まれており、特に四倉海水浴場からの景観が 7 件と最も多い。また、海浜背後の高台からの眺望も好まれており、このうち明神(津守)神社 (Figure 2) と別雷皇大神 (Figure 2) からの眺めは「四倉十四景」の視点場と一致する。

b) 震災以前—成人後も同様に、海浜地からの海景が好まれ、四倉海水浴場からの景観が最も多く回答されている。

c) 震災以後—好ましい海景があったとした回答は、上述した人数から半減した。津波の影響がいかに大きいかが認識できる。また、震災以前の成人前・成人後ともに四倉海水浴場からの海景が好まれていたのに対し、ここでの回答者は「道の駅よつくら港」の建物内からの海景が最も多



Figure 6. The answer about to conduct sea opinion poll among inhabitants of Yotukura

い。これは、四倉海水浴場や四倉漁港よりも安全性が高く、現在、地域住民の情報交流の場(コミュニティスペース)となっていることが要因と思われる。

4-2. 海岸防災について—Table 1③(3)の意識調査として、上述した 15 名を対象に、四倉町の望ましい海岸防災について問うた結果を Table 3 に示す。これより、『c. 避難路』を単独であげた人が 10 人と最も多く、次いで『a. 防潮堤』7 人、『b. 防潮林』6 人と各々約半数を占める一方、『d. 高台移転』は 1 人であった。このことより、回答者はハード面の整備に対しては意見が割れており、ソフト面での防災を求めていることが分かる。

5. まとめ—以上より、防災に関してハード面の対策は今後住民との話し合いが必要不可欠である。そして、防潮堤整備が避けられないのであれば、海岸の眺望点として歴史的にも推奨され住民の幼いころの記憶にもある海岸背後の高台(神社)の視点場整備とともに、海浜地近傍のコミュニティスペースにおける海景の眺望保全を検討していく必要がある。

6. 参考文献

[1] いわき市行政経営部行政経営課:「いわき市の人口」,いわき市, p12, 2012. 4. 1
 [2] 本多徳次:「四倉の歴史と伝説」,四倉郷土史資料集刊行会, p30, pp. 111-113, pp. 132-133, pp. 162-174, 1986. 6. 25
 [3] 本多徳次:「四倉郷土史」,四倉郷土史刊行会, pp. 32-40, 1958. 2. 19
 [4] 鈴木貞夫:「地図からいわきの歴史を読む」, p81, 2002. 7. 15
 [5] 吉田壽三郎:「四倉町案内」, p35, pp. 45-46, 1915. 8. 5